

ウェアラブルシステム開発15年！ 培った知見と技術力をもって産業用途 に特化した「ウェアラブルグラス」

ウエストユニティス株式会社／代表取締役 福田登仁

長年、ウェアラブルシステムの開発を行ってきたウエストユニティスが、その知見をもって産業用途のウェアラブルシステムと親和性の高いウェアラブルグラス「InfoLinker（インフォリンカー）」を開発した経緯と製品について紹介する。

1

ウェアラブルコンピュータ開発の きっかけは、長年のウェアラブル コンピューティングのシステム 開発による

産業用途に特化したウェアラブルグラス「InfoLinker（インフォリンカー）」を開発したウエストユニティスの成り立ちは、マニュアルの企画制作スタジオ、現ウエストユニティスの前身である「テクニカルスタジオ・ウエスト」からである。

当時は様々なメンテナンス用のマニュアルや技術資料の作成を行っていたが、マニュアル制作業界の大半は大手の印刷会社や制作会社の太いパイプでつながった人間関係から構成されており、新規参入は無に等しい厳しい業界だった。

そこで、新たな土俵を獲得するために考えたのが、極力文字を少なくした“マニュアルレス”で“直観的”にわかるフルアニメーション（動画）マニュアルである。

このマニュアルは使用者から直観的に理解ができる便利なマニュアルとして評価を得たが、課題としてパソコンの利用可能な場所に閲覧が限定されることに加えて、作業を中断してパソコンの前に移動する必要があった。

1998年にシースルー型ヘッドマウントディスプレイ（以下、HMD）に出会ったことで、先の問題をクリアし、加えてハンズフリーでマニュアルを参照できるデバイスとして、ウェアラブルコンピューティングの事業へ乗り出すこととなる。

ネットワークを介して遠隔地にいる作業者がサーバにアクセスすることで、データの閲覧や現場の状況共有をハンズフリーで作業を進めることを前提としたウェアラブルコンピューティングのシステム開発に長年注力してきた。

実例として、HMDを使ったウェアラブルシステムの開発は、モータースポーツへの導入（ピットクルーがHMDで計時データや走行位置を確認できるもの）から始まり、障害者支援システム（音声認識による字幕表示）、レスキューシステム（救助隊員に災害現場での状況などの共有化）を経て、RMS遠隔作業支援システム（作業状況を離れた場所にいる作業熟練者に共有をしながら、経験の浅い作業者に指導が行える）、作業ナビゲーションシステム（整備行程やメンテナンス状況の共有化）などがある。

結果、実際に使用した声から、現場が必要としている様々な要望や課題点が集まり、システムだけではなくデバイスに対しても理想とする形が見